

そ其廻り日本の三十里にあまりたる島にて、たかさごに近きゆへ、たかさごを責取て、二島を領地とし時を待て福建道をも再領し、大明の世を再興せんとおもふ志し深かりければ、厦門の名を改め、思明州と號せしは、明朝を思ふの意なり、又臺灣の名をあらため、東寧と稱せしも、日本を忘れず、故郷を祝きし意とかや、國姓爺智謀無雙の軍將たりし事、長崎人の明清圖記に委し、眼前見聞し事なれど、これもいまはむかしと成て、知人もなければ、おもひ出るあらましとて、老たるが語りしをしるし侍りぬ、國姓爺は日本寛文六年の比、東寧にて終りぬ、其子錦舍遺跡を續て、なを東寧を治め持て、清朝にしたがはずして在しが、是も死して、其子奏舍そうしゃなを相續して在しかども、中々父祖には似もせぬ器量にて、十五省に味方なく、吳三桂も死して、遺族もちりなくなれば、心ばそくやおもひけん、清朝に降參し、東寧を開きて北京に到りて、東海王に封せられ、廣大の宅地を賜はり、今にありやなしや、飛鳥川の淵瀬は、もろこしもおなじ世のながれにて、常なきを常とす、豈おもはざらんや、

〔臺灣紀略〕沿革

先是北線尾日本番來、此搭寮經商、盜賊出沒于其間、爲沿海之患、後紅毛乃荷蘭種、由咖嚙吧來、假其地于日本、遂奄爲己有、築平安赤嵌二城、倚夾板舡爲援戰、而各社士會聽其約束、設市于安平鎮城外、與商賈貿易、至壬辰年、土民郭懷一反、西王氏召土番擒之戮子、赤嵌城民被土番警殺、漸以消索、蓋至此歸紅毛已三十餘年矣、辛丑年、僞鄭成功敗自長江歸、漂泊無所、土人勾之往、乃發大小船千餘號、遣何斌到港、由鹿耳門入潮水、忽添數尺、紅毛戰敗、逃入鎮城、堅閉不出、鄭兵沿山圍之、累月柴蔬不得入、又乏外援、紅毛突圍遁歸、成功因改臺灣爲僞東都、設一府二縣、僞立府尹及天與萬年二縣、壬寅年五月、成功卒、提督馬信立其胞弟鄭世襲、改號護理、癸卯年、成功之子鄭經自厦門來、與世襲爭國、世襲兵屈退歸、經遂嗣位、後經至厦、委翁天祐爲轉運使、任國政、于是興市肆、築廟宇、新街